

新たな視点

学籍番号：26S1038 氏名：櫻井優衣

鈴木学長、この度は大変貴重なご講義をありがとうございました。現在、看護倫理学の講義にて、政府・厚生労働省側、医療従事者側、患者家族側に分かれてディベートを行うために準備をしております。私は政府・厚生労働省側なので、インターネットにて政府や厚生労働省のことを調べております。今回のご講義を通して、決して調べられない厚生労働省の裏側までお聞きすることができ、大変なお仕事なのだと改めて感じることができました。

私は鈴木学長のご講義を通して、特に印象に残った内容が3つあります。

1つ目は、厚生労働省とWHOの意思決定プロセスの構造的な違いについてです。講義を通して、厚生労働省の意思決定プロセスはボトムアップ型である一方、WHOではトップダウン型の意思決定が行われていることを学びました。これまで両者の意思決定の違いについて意識したことがなかったため、とても興味深く感じました。この講義を通して、それぞれの組織の役割や運営体制の違いが、意思決定の進め方にも反映されていることを理解することができました。また、組織の目的や規模、活動する環境によって適した意思決定の方法が異なることを知り、行政機関や国際機関の仕組みを考えるうえで新たな視点を得ることができました。

2つ目に語尾を、義務を示す「shall」とするのか、努力義務を示す「should」とするのかについて、時間をかけて慎重に検討したうえで文書が公表されるという点が印象に残りました。1つひとつの言葉が持つ法的・社会的な意味や影響を十分に考慮しながら文書が作成されていることを理解することができ、その姿勢に強い印象を受けました。この講義を通して、私はこれまで他の講義で目にしてきた厚生労働省やWHOの文書についても、このような慎重な議論や検討を経て作成されていることを改めて認識し、新たな視点を得ることに繋がりました。

3つ目は、これからの日本の医療政策とメディアについてです。その中でも、「誰のために、何のために報じるか」の原点回帰を行うことを求めているということがとても印象に残りました。私は、演習などで資料を作る際やレポートを書く際に、WHOなどの機関が出している情報を引用していましたが、それ以前に自分の中で「偉い機関である」という認識を外した状態で、WHOなどの機関が出している情報を捉えてみるということが大事であると学び、それはジャーナリストに対する課題でもあると理解することができました。